日韓古代木製品についての覚書
－タタリ状製品について－

石橋茂登

1．はじめに
2．タタリとタタリ状製品
3．おわりに

要　旨　日本と朝鮮半島の古代文化に関しては、さまざまな相互関連が指摘されてきた。木製品などの有機質遺物もそのひとつである。本稿でおもな対象とするのは、タタリと呼ばれる紡績関係の道具である。『木器集成図録　近畿原始編』によれば、タタリの機能は２つある。ひとつは打ち叩いて柔軟にした麻の繊維の束をかける台。そこから繊維を細く割りさいてつなぎ、撚りをかける以前の糸をひきだす績麻（うみお）の道具である。もうひとつは、紡いで枠（かせ）にかけた綛（かせ）を一時的に掛けておくための綛掛けとされる。民俗例などを参考に考えると、前者は細い小型の柱（棒）を立てて、繊維を一時的に掛け置くための掛台である（Ａ類）。割いた植物繊維をつなぎ合わせる「績（う）む」作業に用いる場合が多い。後者は短い棒を立てた台を複数組み合わせて、棒から棒を巡るように綛（かせ）を掛ける道具である（Ｂ類）。

Ａ類の出土品では沖ノ島22号遺跡出土の金銅製品がタタリとして著名である。千葉県菅生遺跡、鳥取県塞の谷遺跡、島根県タテチョウ遺跡などの木製品がタタリとされる。韓国では、光州新昌洞出土の板状品や慶山林堂洞低湿地遺跡出土品にそれらしいものがある 。

タタリは日本独自の道具ではない。現代韓国の民俗例、韓山モシの伝統技術（苧麻・カラムシの紡績）でＡ類のタタリ状製品を使っている。『魏志倭人伝』の記載や出土した布から、古くから倭人は苧麻の紡績をしている。中国の絵画にもＡ類が描かれているから、中国に淵源があるかもしれない。民俗例では苧麻にタタリを使用する場合が多いが、絹の糸をつくる作業にもタタリによく似たものがみられる。タタリは苧麻・麻に限らず、短い繊維から糸を績む作業のときに繊維をかけるＡ類と、綛をかけて糸巻に巻き取る作業で使うＢ類のそれぞれが、必要に応じて用いられたと考えられる。Ａ・Ｂ類いずれも簡単な形なので、出土していながら不明品などとして見落とされている可能性がある。

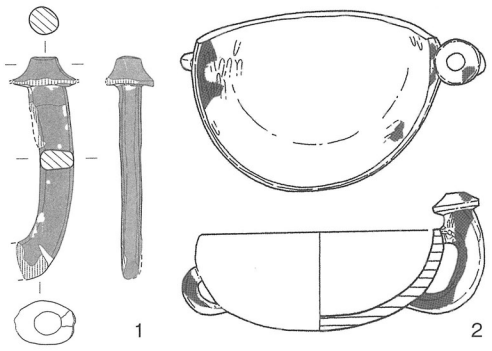
キーワード　　木製品　タタリ　紡績　苧麻　モシ

奈良文化財研究所　飛鳥資料館

1．はじめに

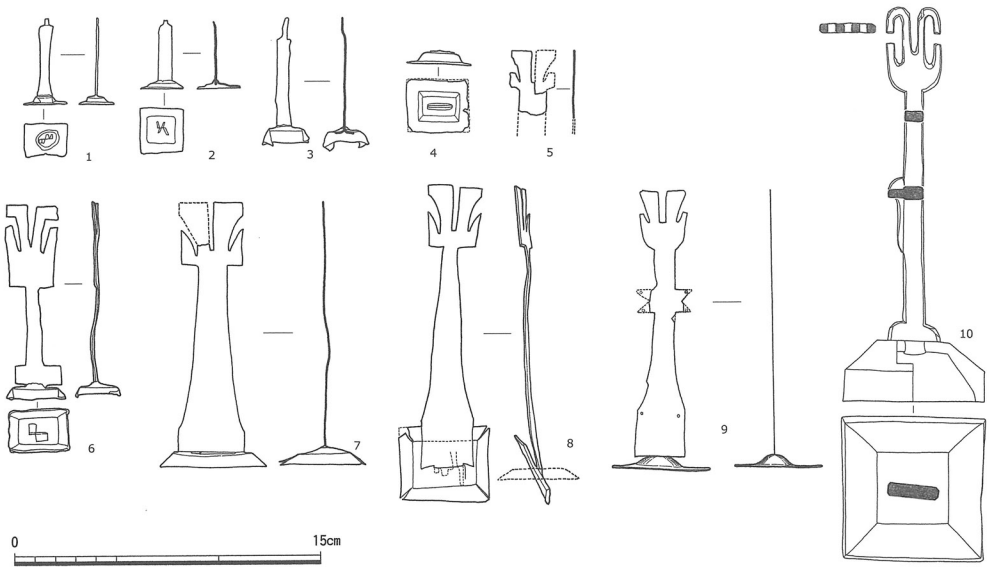
古代の日本と朝鮮半島については、さまざまな文化要素についての相互関連が知られている。思いつくままにいくつか挙げるだけでも、水稲耕作、青銅器や鉄器の製作技術、須恵器製作技術、騎馬関連技術、横穴式石室、仏教と寺院、天文暦法の伝来などがあろう。人とモノの移動とともに、技術や思想も含めて、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代それぞれ、日本の古代文化を語るうえで欠かせない要素の多くが朝鮮半島からもたらされた。もちろん、いま挙げた以外の前後の時代にも同様だったことは言を俟たないし、逆方向の動きもあったであろう。

研究対象としたのは、当初、三国時代の木器であった。限られた時間の中ではわずかな調査しかできなかったが、日本の木器と比較して、まずはその類似に驚いた。器種、技法などの面で、日本の弥生時代、古墳時代の木器は朝鮮半島から大きな影響を受けていると感じた。農具類については、水稲農耕の技術そのものが大陸由来であり、朝鮮半島の農具類とよく似ているのは当たり前といえる。体系的に道具が似ているのであれば、使い方、農耕技術そのものも類似していたと推測できる。そのほかの木製品、たとえば匙の形状や容器類の把手の形態など、デザイン面での類似は容易に看取されるし（第１図）、ジョッキ形の容器を縦に木取りするなど、技術的な面でも共通する部分がありそうである。特殊な製品も同様で、円形の蓋を二つ連ねた特徴的な蓋が青谷上寺地遺跡にあり、韓国の咸安城山山城では同様な二連蓋[1]が出土している。また木製埴輪によく似たものが韓国光州の月桂洞古墳群でも出土している。ほかに類似する木製品をあげればきりがない。土器や墓制など、さまざまなものが影響を受けているのだから、木器も同様なのは自然なことである。しかし相違点もある。それらを炙り出せば、両地域の特質や文化の伝播と変容を明らかにできるだろう。



第１図　木製容器の把手の類似
１：慶山林堂洞　２：鳥取県青谷上寺地遺跡
縮尺不同

日本と朝鮮半島の木製品、さらにその他の有機質製品も含めて総合的に比較検討することを将来的な視野に入れつつ、本稿ではその端緒として、筆者が関心を持った遺物に着目して述べてみたい。主な対象とするのは、紡績にかかわる遺物であるタタリである。



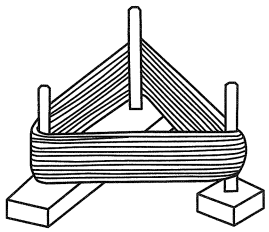
第２図　金属製タタリ
１～８：沖ノ島22号遺跡　９：沖ノ島５号遺跡　10：八代神社

２．タタリとタタリ状製品

タタリは紡績関係の道具の一つである。『木器集成図録　近畿原始編』によれば、タタリの機能は２つあるとされる[2]。ひとつは打ち叩いて柔軟にした麻の繊維の束をかける台で、そこから繊維を細く割りさいてつなぎ、撚りをかける以前の糸をひきだす績麻（うみお）の道具である。もうひとつは、紡いで枠（かせ）にかけた綛（かせ）を一時的に掛けておくための綛掛けとされる。

民俗例などを参考に考えると、前者は細い小型の柱（棒）を立てて繊維や糸を一時的に掛け置くための掛台である（本稿ではＡ類とする）。先端が二股に分岐するものが多い。柱は木や竹でつくり、加工して枝別れを作る場合と、自然の形状を利用する場合がある。台を用いず突き立てて使用するものもある。作業時は単独で用いられることが多いが、２個一組で使用されることもある。裂いた植物繊維をつなぎ合わせる「績（う）む」作業に用いる場合が多いようである。近世の職人絵では殊数作りにも用いる。

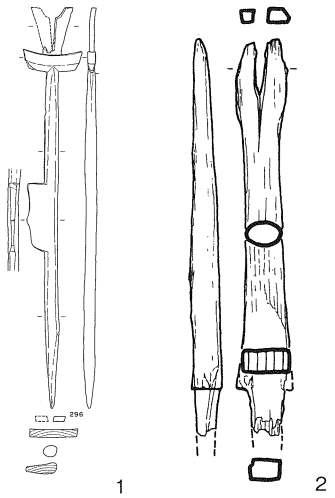
後者は、柱を立てた台を複数組み合わせて、柱から柱を巡るように綛（かせ）を掛ける道具である（Ｂ類とする）。太田英蔵氏[3]は沖ノ島出土品にタタリを認め、Ａ「四分岐頭のたたり」、Ｂ「糸掛けのたたり」とし、Ａを耳の有無で第１～３類に、Ｂを遺物の組み合わせ状況から１～３にわけた。本稿のＡ類は沖ノ島以外も対象とするので分岐数を４に限定しないが、Ａ・Ｂの大別はこれと基本的に同じである。出土品では沖ノ島22号遺跡出土の金銅製品の一部（第２図１～３）が太田のＢ、本稿のＢ類にあたると推測されている。これはもちろ



第３図　タタリ（Ｂ類）

ん実用品ではなく、形代である。辞典類をみてみると、『日本民具辞典』[4]に挙げられているタタリは、長めの台に２本、短めの台に１本、上部が細くなった棒を立てたもので、糸の太さをより分けながら糸枠に巻き取る道具とされる。『和漢三才図会』の図はこれと同じで、Ｂ類の類例である（第３図）。近世初期の『職人尽絵』（喜多院蔵）などにはその使用場面が描かれている。

つぎに前者（Ａ類）は、平面方形または円形の台に柱が立ち、多くは頭部が２または４つに分岐したり、切れ目がある。柱の側面に耳や枝がつくものもある。形態と機能の差は明確ではない。三重県神島八代神社[5]や福岡県沖ノ島22号遺跡・５号遺跡の金銅製品はそれを模造した形代にあたる（第２図）。沖ノ島22号遺跡は金銅製紡織機関係品（栫（たたり）・紡錘・刀杼など）とともに金銅製人形が出土し、年代は７世紀とされる。５号遺跡は半岩陰・半露天祭祀でⅢ段階とされ、須恵器から７世紀後半とされる[6]。ここでも金銅製・鉄製の人形などとともに銅製紡織関係品（栫・紡錘・刀杼など）が出土している。また露天祭祀でⅣ段階になる１号遺跡（８～９世紀）でも銅製紡織関係品（栫・刀杼・桙など）がみつかっている。沖ノ島の金銅製タタリ形は頭部が４枝に分岐していることと、柱軸部の側面に耳がついているものが多いこと、台に挿入するようになっていることが特徴として認められ、その元となった木製品のタタリがあることもわかっている。『木器集成図録』に挙げられた千葉県菅生遺跡（６世紀）や鳥取県塞の谷遺跡（５世紀）の事例は古墳出土品の玉杖とよばれるものとよく似ているが、頭部が枝分かれしていること、耳があることから、タタリの柱部とされている。静岡県山の花遺跡のタタリ状製品（第４図１）も儀仗のような頭部形状をしており、側面に鰭のような耳がつき、下端は尖っている。これらは装飾的な製品で、実用品ではなく儀礼用の形代といえよう。側面の耳は板状の装飾の可能性もあるが、伊勢神宮の神宝などを参考にすれば枝分かれしていたものを表現しているのであろうか。島根県タテチョウ遺跡の木製品（第４図２）は、台に挿入できる角柱の先端が二股に分かれているシンプルなもので、実用品のタタリとされる。実用のタタリは台の一辺20cm前後、台の下端から柱の上端まで40~50cmが標準的な大きさと推定されて



第４図　タタリ・タタリ状製品（Ａ類）

１：山の花遺跡 ２：タテチョウ遺跡
縮尺不同

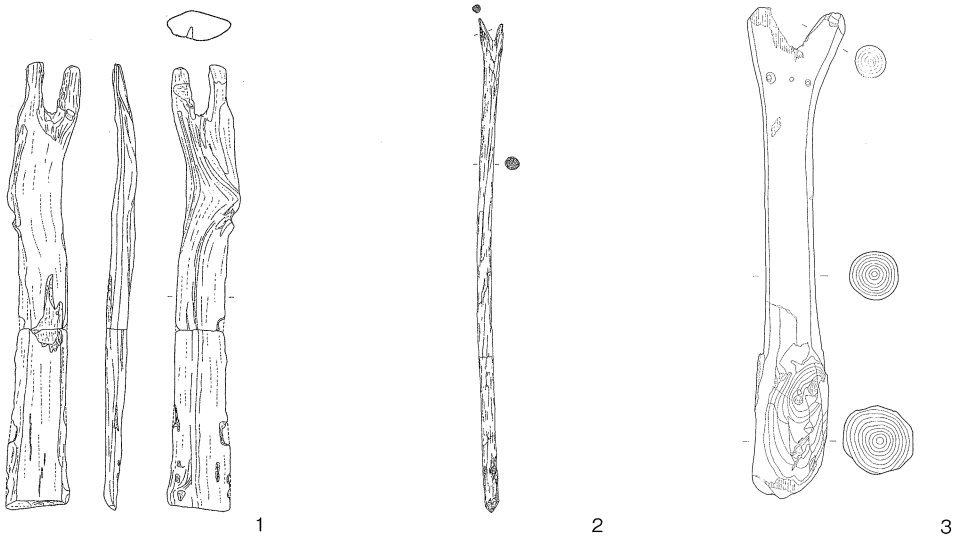
おり、19世紀の絵図にみられる様子と同じように床に置いて座って作業するのにほどよい高さとされる。これらの木製タタリは、装飾的なものは古墳出土の玉杖と似ており、うらがえせば玉杖と言われるものにタタリの形代というべき石製模造品が含まれる可能性があろう。また、タタリと報告されていなくても、出土木製品のうち二股に枝分かれした柱状の木製品があれば、実用的なタタリの可能性がある。出土品でタタリ、タタリ状製品といわれるものはほとんどがA類である。頭部の分岐や柱側面の耳が特徴的なためだろう。

日本でのタタリは古墳時代中期以降にみられるようである。杵や糸巻きの類は弥生時代からみられるから、タタリはそれより遅れて出現したとみられる。タタリの出土数も限られており、あまり普遍的な道具ではなかったかもしれない。

タタリが日本独自の道具なのか、朝鮮半島に類例があるのかはひとつの問題である。

韓国の出土例では、光州新昌洞出土品（『韓国木器資料集Ⅲ』no.880。第５図１）のなかに板状品（長さ59.6cm）で先端が二股になっているものがある[7]。咸安城山山城出土品（同no.904。第５図２）は長さ94.4cmあるが、二股の柱である。また慶山林堂洞低湿地遺跡（報告書 no.3597。第５図３）も89.2cmとやや大型だが、二股の柱である[8]。これらは詳細に観察する機会をまだ得ていないが、椅子に座って作業する場合も考慮すれば、実用のタタリの可能性もありうるだろう。

小林行雄氏[9]は雄略朝に漢織・呉織が渡来した記事があることから、５世紀後半に百済などの渡来人によって織物の技術が伝えられたと考えている。タタリについて紹介した角山幸洋氏[10]は、韓国の民俗例を紹介している。その事例が古代にさかのぼる可能性は十分あろう。また、タタリの語源は諸説あるが、享保２年（1717）成立とされる新井白石著の



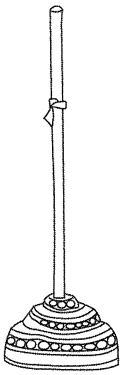
第５図　韓国のタタリ状製品
１：光州新昌洞　２：咸安城山山城　３：慶山林堂洞低湿地遺跡　縮尺不同

語源書『東雅』[11]によれば、タタリは百済の方言だという。

現代韓国の民俗例としては、韓山モシの技術者がまさにA類のタタリ状製品を使っている。モシ（모시）というのは苧麻（カラムシ）のことであり、苧布もまたモシと呼ぶ。タタリ状製品はチョンジ（전지）と呼ばれている。林在圭氏の報告[12]や韓山モシを紹介する動画[13]を参照すると、モシの靱皮繊維を裂いた苧糸をさらに細く裂き、間隔を開けて置いた２つのタタリ状製品の上部の二股部分に渡しかける。それを２本ずつとり、膝上で転がして、撚（よ）り合わせて糸をつなぐ。その後、工程を経て、大型のタタリ状製品（A類）２つの上に、穴を複数あけた棒を差し渡し、各穴から繰り出す糸をまとめてゆくという作業がある。

韓山モシの技術は古代におけるタタリの用法を彷彿とさせる。『万葉集』2990番歌は「をとめらが績麻（うみを）の絡垙打麻掛（たたりうちそか）け　うむ時なしに恋ひ渡るかも」と歌う。打った麻という違いはあるが、少女たちが苧績みの作業をして、タタリに糸を掛ける作業が目に浮かぶようである。このタタリは、綛かけのような紡いだ糸を巻くB類のタタリと解釈される場合が多いようだが、日韓の民俗例も参考にすれば、打った麻を掛けて糸を績む作業であれば柱状のA類のタタリではなかろうか。

韓山モシでタタリ状製品（チョンジ）を使うのは、細くほぐしたカラムシの繊維を２本撚り合わせて糸にしてゆく苧績（おう）みの作業である。おなじカラムシの紡績でも日本の民俗例ではタタリを用いない場合も多いようだが、福島県昭和村の「からむし織り」では「おさき棒」と呼ぶ、タタリ状の道具が使われている[14]。円形の台に１本の竹の柱を立てたものや、ビール瓶に上端を割った竹を挿して、繊維を細く裂く作業のときに掛けておく台として単独で用いる。また、この「おさき棒」は、もともとは囲炉裏に突き刺して、炉辺で作業していたものだという。台に立てて床に置くようになったのは、民家に囲炉裏がなくなってからのことである。古代のタタリも台を伴わずに突き刺して用いる場合が考えられ、先端が尖っている木製・竹製のタタリの柱が出土した場合、それが形代なのか実用品なのかは先端形状では決めにくいかもしれない。



第６図　『搗練図』にみえるタタリ状製品

このように、古代と現代のタタリの存在は、古代に朝鮮半島から日本に苧麻の紡績技術と道具が伝来したことをうかがわせる。

中国でも絵画資料にタタリ状製品が認められる。角山幸洋氏が紹介した絵図[15]には柱状のタタリ状製品（A類）が一つ立ち、椅子に座った人物が太もも上で苧糸をより合わせてつないでゆく様子が描かれている。また盛唐期の宮廷画家である張萱（ちょうけん）の絵画を、徽宗皇帝（北宋、12世紀）が模写したとされる『搗練図』（ボストン美術館蔵）に

も、装飾された円形の台に柱が立ち、赤いリボンのようなものがついているタタリ状製品（A類）の横に、立膝で地に座って糸を手繰るような動作をしている女性が描かれている（第6図）。太田英蔵氏[16]はこれを春日大社の線柱とおなじ、裁縫用の糸を掛けて繰る道具とみている。また太田氏は漢代の画像石にも糸繰りのタタリがあると記す。

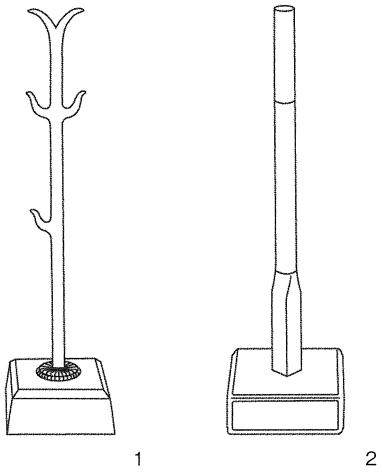
いま筆者はタタリの中国での出土例や、もっと古い事例を把握していないが、タタリを用いる技術は中国に淵源があるかもしれない。

ところで、苧糸をつなぐ作業は、苧麻の繊維が1.5～2m程度の短いものだから必要な作業であり、長い糸が得られる素材（繭から絹をひきだすような）では不要であろう。後でみるように苧麻だけに限定されるわけではないが、タタリは苧麻のような比較的短い繊維の紡績で使う道具と思われる。そこで、苧麻が古代にあったかどうかについてみてみよう。ただし古代では苧（カラムシ）と麻（大麻）は使い分けられているという指摘もあり[17]、史書の苧麻という記載はカラムシと大麻の双方を指しているかもしれない。

朝鮮半島では「麻紵（まちょ）」の記述が『三国史記』「新羅本紀」巻第11の憲安王4年（860）9月条に出てくる。また日本側については、『後漢書』倭伝に「土は禾稲（かとう）・麻紵（まちょ）・蚕桑（さんそう）に宜しく、〔倭人は〕織績（しょくせき）を知り、縑布（けんぷ）をつくる」とし、『魏志倭人伝』（『三国志』魏書東夷伝倭人条）にも「禾稲（かとう）・紵麻（ちょま）を種（う）え、蚕桑（さんそう）・緝績（しゅうせき）し、細紵（さいちょ）・縑緜（けんめん）を出す」とある[18]。『後漢書』は『三国志』より遅れて成立するが、中国側の記録からすると、倭人は3世紀には苧麻から糸を紡いで布を織っていることが知られる。布目順郎氏は『魏志倭人伝』の記述が『漢書地理志』に似るので信用できないとするが、出土品でも弥生時代前期の山口県綾羅木郷遺跡で苧麻の繊維がみつかっており[19]、むしろ相当に古くから倭人は苧麻の紡績をおこなっているとみてよい。朝鮮半島については記録がないようだが、おそらく同様に古くから使っていただろう。東村純子氏[20]によれば、苧麻の編布は縄文時代からある。また靭皮繊維を得るために苧麻の表皮を剥ぎ取るのに使う苧引具も、手持ちの小型の手鎌と区別しにくいものの、古墳時代の出土品が知られている。飛鳥時代になると、『日本書紀』持統天皇7年（693）3月条の詔で、桑・紵（からむし）・梨・栗・蕪菁（あをな）等の栽培を勧奨している。『肥前国風土記』基肄群姫社（ひめこそ）郷には、珂是古（かぜこ）が見た夢に臥機（くつびき）と絡垜（たたり）とが舞い遊び出てきて、身体を押し驚かす話がある。姫社の神は渡来人の機織りが奉じた女神だという。『日本古典文学大系』では臥機を韓国風の一種の機織り、絡垜を四角形の枠の糸繰り道具としており、タタリというより糸巻き、綛（かせ）かけ（舞羽（まいば））と考えるようである。また、『延喜式』祝詞のうち、竜田の風の神の祭には「比売神（ひめがみ）に御服（みそ）備え、金（こがね）の麻笥（おけ）・金の栫（たたり）・金の枠（かせ）、（中略）雑の幣帛奉りて（後略）」とある。沖ノ島出土の金銅製遺物を彷彿とさせる描写である。韓国のモシでもタタリ状製品に掛けた糸を撚って桶に入れてゆき、その後の工程を経て巻き取っていくので、祝詞にみえる道具は苧麻の紡績に関わる道具を表しているのであろうか。

『延喜式』巻４「伊勢大神宮」には「神宝廿一種」として金銅多多利二基、金銅麻笥二合、金銅賀世比二枚、金銅鏄二枚、銀銅多多利一基、銀銅麻笥一合、銀銅賀世比一枚、銀銅鏄一枚、ほかが記載されている。この多多利は高さ１尺１寸６分、土居（台）の径３寸６分とされており、円形の台に柱が立つ形状とみられる。床に座って作業するのにほどよい高さであろう。現在の伊勢神宮の神宝にも、形状は沖ノ島と違うが、タタリをはじめとするこれらの品々がみられ、A・B類両方のタタリがふくまれている[21]。皇大神宮御料の「金銅御榻」（第７図１）がA類である。方形台に柱がたち、上端は二股、その下に左右の枝があり、都合４枝の頭部をもつ。側面には鉤の手状の枝が出ている。柱高35.1cm、土居高3.9cm、土居方10.9cmである。寛正３年(1462)調進とされる伊雑宮古神宝にもほぼ同様のものがある。一方、豊受大神宮御料の「御榻」（第７図２）は、方形台に下部が四角、上部が円柱の柱を立てる。枝分かれや切り込みはない。柱高35.1cm、土居高3.9cm、土居方10.9cmと、A類と同じ実用的な大きさである。糸を巻き付ける「御木絡綀」は、これがL字形に３基連結したような形状をしている。柱高31.2cm、土居高3.9cmでやや低めである。これはB類のタタリの仲間で綛掛けと思われるが、太田英蔵氏はこのままでは使えないので、ほかに１柱の具を要するとしている。すると、豊受大神宮御料の「御榻」は「搗綀図」のように単独で用いるのか、本来は「御木絡綀」と組み合うのかわからないが、後者の可能性もあるかもしれない。

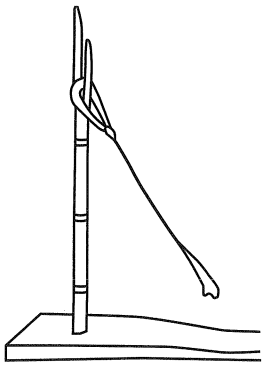
また、日本や韓国の民俗例では、カラムシの収穫から糸を績んで布を織る作業まで一貫しておこなうようだが、かつては必ずしもそうではなかったらしい。永原慶二氏によると、苧麻の調達から布の生産は工程が未分化で自給性が高いものの、日本の律令期から中世の史料や絵画からは、カラムシからとった繊維が「青苧」として流通し、それを入手して庶民が糸を績んでいた様子がうかがわれる[22]。したがって歴史時代の遺跡からタタリの遺物が出るとしても、必ずしも全工程の道具を伴うとは限らないだろう。



第７図　神宝のタタリ

1：「金銅御榻」　2：「御榻」

いま知られる民俗例では、タタリ状製品を苧麻の作業に使用している場合が多いが、タタリ状製品は必ずしも苧麻に限定されるわけではない。竹内晶子[23]が紹介した、絹の糸をつくる作業のなかにもA・B類のタタリ状製品がみられる。絹の糸は細くて質の良い「絹糸」と、虫の出た孔があいたりして「絹糸」にできない繭からとりだした「紬糸」がある。後



第８図　「撚綿軸」

者の繭を引き延ばした「真綿」から糸を引く作業において、Ａ類のタタリ状製品に真綿をかけている様子が絵に表されている。Ｙ字形に枝分かれした木の棒を、台に立てただけの簡単な道具である。名称は挙げられていない。また同じく、Ｂ類のタタリ状製品も、２本の柱と１本の柱が立つ台を組み合わせ、綛をかけておき、糸を引き出しながら糸枠に巻き取る作業にみられる。したがって、タタリ状製品は苧麻、麻に限らず、絹にも用いられる。短い繊維から糸を績む作業のときに繊維をかけるＡ類と、綛をかけて糸巻に巻き取る作業で使うＢ類のそれぞれが、必要に応じて用いられたと考えられる。

『和漢三才図会』[24]（江戸中期）に記載される「絡杼」はＢ類である。同書でタタリ状の製品として、もうひとつ「撚綿軸」というものがある（第８図）。Ａ類のタタリに似ており、木・石の台上に先端が叉になった長さ１尺ほどの軸を挿す。叉の頭に綿（しのまき）を取り付け、綿を引き出して撚りをかけながら綿糸をつくり、軸に纏いつける、とある。木綿に使う道具であるが、これは竹内氏が図示した、繭の「真綿」から絹糸を引く作業の道具とほぼ同じものである。木綿の「綿」や絹の「真綿」をひっかけるために、このタイプの道具には枝が必要なのである。とすれば、沖ノ島などの、頭部が切れ込みではなく分岐して枝になっている形態のタタリは、絹（「紬糸」）に関係するのではないかという推定をしたくなる。繭からつくる綿を掛けるのだから、ただの棒状の柱や切れ込みではなく、枝が便利なのではないか。近世以前の絹生産技術の詳細を知りたいところである。

古代では絹と苧麻が主要な紡績の材料だったが、永原慶二氏によれば、絹が高級品で苧麻が民衆的というわけではなく、苧麻も高級品は貴族の衣料として重要であった。繊維類が調庸の主要な品目だったことからみても、貨幣経済が未発達な時代において、絹とともに苧麻の紡績関係技術が重要だったことは間違いなく、絹だけが重視されたのではない。神宝などでタタリとともなう道具には「麻笥」のように「麻」の字が入っていることもあり、これらが苧麻・麻に関係するものだった可能性はある。『令義解』巻２、神祇令には伊勢神宮の「神衣祭」について、「参河の赤引の神調の糸を以て神衣を織り作し、また麻績連等、麻を績みて以て敷和の衣を織り、以て神明に供える。故に神衣といふ。」と記す。現代の伊勢神宮関連祭祀では、赤引の糸は絹糸で、絹で織る神衣の布が「和妙」（冬用）、麻のものが「荒妙」（夏用）となる。したがって神宝の紡績具には麻関連の道具と、絹関連の道具が両方あってもよい。絹に関わる道具としてタタリが使われていた可能性も考えておくべきであろう。苧麻、絹など材料に応じた特有の道具を弁別する材料を探したいところである。

一方で、かつてタタリ台とみられた方形台状木製品には、綛(かせ)かけ、あるいはそれ以外の台の可能性も指摘されている。また、タタリ状のもので下端がとがっているものがあれば、台を用いずに地面に刺して立てるのであろう。そういう実用の仕方があった可能性と、形代として用いた可能性とが考えられる。実用品のタタリはA類なら先端が2～4分岐していたり、二股、あるいは切れ目を入れた木や竹の柱と台からなる。B類はまっすぐな棒状の柱と台からなるものが多いとみられる。いずれも簡単な製品である。そのため、出土していながら、不明品などとして見落とされている可能性がある。竹製品の場合は遺存しにくいことも考えられる。今後は出土品の再検討も含めて例が増加することを期待したい。

上記のように、タタリ・タタリ状製品は日韓に民俗例があり、遺跡出土品にもその可能性をうかがわせるものがある。日本のタタリの祖形は、朝鮮半島に求められると考えたい。

3．おわりに

日本で木製品研究が進展したのは、低湿地遺跡で良好な資料群が各地でみつかるようになってからである。『木器集成図録　近畿古代編』[25]と同『近畿原始編』[26]は木器研究のその時点での集大成であり、その後の研究の基盤となった。ここ20年ほどで資料も研究者も増えたが、まだ研究の余地が多く残されている分野であろう。韓国でも発掘調査事例が増加したことで、近年は木器に焦点を当てた展覧会と図録の刊行、木器資料集の出版がみられ、両国の木器を総合的に研究する条件は整いつつある。それぞれの特徴を明らかにしつつ、日本に受容されたもの、されなかったもの、反対に朝鮮半島へもたらされたものを検討することで、文化の伝播と変容を明らかにできるであろう。それは当時の社会の動きを反映したものであると推察される。

農具類は農耕技術とともに木製農具の総体というべきものが体系的に日本へ伝来したのであろう。朝鮮半島古代の青銅器については、楽浪郡への朝貢によって三韓の貴族層にもたらされた漢の文物が、個別的な伝播で本来の用途から切り離されたような様相であるのに対し、下位階層では密接な交流によって非漢式遺物の体系的な伝播があったと指摘されている[27]。朝鮮半島から日本への青銅器の伝播もおそらく同様であって、朝鮮半島や中国の青銅器の使い方が体系的にもたらされたのではなく、断片的に青銅器がもたらされ、そのことに起因する独自変化が起こったと推察される。木製品も似た状況だったと推察されるのであり、農具や紡績具のように、技術体系と密接に関連する道具類は体系的に日本へ受容されている。特殊な祭祀品などはそのような受容をされていない場合があろう。

今後の課題として、今回は十分調査できなかったが、木製品だけでなく有機質遺物を研究する上で興味深いものを簡単にあげておこう。ひとつは刻骨である。飛鳥藤原第177次調査において、ウマの中足骨製の刻骨が出土した。鹿角や牛馬の骨に平行線を多数刻む刻骨

は、縄文時代にはなく、弥生時代から古代まで日本に類例があり、同時並行的に朝鮮半島でも使用されていることが遺物から分かっている。スリザサラのような楽器とも祭祀用具とも言われ、その用途ははっきりしないが、摩滅が狭い範囲に限られることからササラには疑問がある。刻骨については木村幾多郎氏[28]が全体的な整理をし、その後、木川正夫氏[29]が集成しており、近年も類例は増加している。木村氏は韓国では慶尚南道東南部海岸地域に限られるとし、卜骨の分布と重なることを示した。近年でも慶山林堂洞低湿地遺跡に平行線を刻んだ刻骨があり、同じ遺跡で卜骨が出土している。これらは朝鮮半島から日本へ伝播した文化の一つと考えられ、製作技法、使用法ともに興味がもたれる。なお、調べた限りでは中国には類例を見出せなかった。

また刻骨、ササラと関係する遺物として鋸歯状木製品などと呼ばれる刻みの入った棒がある。木川氏[30]によれば叩き棒、皮なめし、斎串、編台の目盛り板、ササラゴといった諸説がある。日本出土例は握りやすい柄がつき、幅広い部分に規則的に刻みがついており、ササラゴとしての使用に適している。しかし韓国では鋸歯形木器、異形木器などと称されて、おなじように棒状木製品に鋸歯状の刻みがついているが、必ずしも日本のものほど整然としていない。国立金海博物館の『木、人と文化』図録[31]では異形木器のうち長い柄がある全長30cm程度のものを鋸歯形木器、柄のない全長10数cmのものを尺としている。度量衡に関わる道具としては目がやや乱雑な印象をうけるが、日本出土例では太宰府のもの[32]が全長16cmで比較的整然と鋸歯を整形しており、同様な道具の可能性もある。

また、木質遺物としては、建築部材をもとにした日韓の相互比較も課題と考えられる。木製容器や土木技術に朝鮮半島から日本への影響を色濃く看取できるのだから、建築技術、木工技術も相互比較によって得られる知見は多くあるに違いない。飛鳥寺にはじまる本格的な寺院建築に関しては、百済からの技術者、あるいは高句麗・百済系の画師などの存在が文献上から知られ、考古学や建築史学の面からも明らかな技術の移入を認められる。木器の状況からすれば、それ以前、古墳時代や弥生時代の建築もまた、朝鮮半島から技術やデザインを多く取り込んでいることは想像に難くない。

今後はいま挙げたような要素も含めて、日本と朝鮮半島との木製品などの研究をおこないたい。本論はわずかな遺物について綴ったに過ぎないが、有機質遺物の総合的な比較検討を通じて、日本と朝鮮半島の密接な交流によって生まれた馥郁たる古代文化の姿が浮かび上がってくるであろう。

日韓共同研究の機会を与えていただいたことと、さまざまな形でご協力いただいた方々に感謝しつつ、擱筆とする。

註

1 国立伽耶文化財研究所・国立金海博物館『나무, 사람 그리고 文化』2012年。
2 奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿原始編』解説、1993年、pp.217-221。
3 太田英蔵「沖ノ島出土の紡織具」『海の正倉院　沖ノ島』毎日新聞社、1972年、pp.188-193。
4 「たたり【絡】」、日本民具学会編『日本民具辞典』ぎょうせい、1997年、p.328。
5 金子裕之「三重県鳥羽八代神社の神宝」『奈文研紀要2004』2004年、pp.66-67。
6 小田富士雄「沖ノ島祭祀の再検討３」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』３、プレック研究所、2013年。
7 国立伽耶文化財研究所『韓国木器資料集』Ⅲ、2014年。
8 財團法人嶺南文化財研究院『慶山 林堂洞 低濕地遺蹟 木器』、2014年。
9 小林行雄『古代の技術』塙書房、1962年、pp.67-69。
10 角山幸洋「出土多多利について」『青陵』75、橿原考古学研究所、1990年、pp.１-４。
11 『古事類苑』産業部17、p.79に引用。
12 林在圭「韓服の特徴と韓国伝統織物の韓山モシの技術伝承」『静岡文化芸術大学研究紀要』vo.14、2013年、pp.21-30。
13 韓山モシは韓国の無形文化財に指定されており、さらに2011年にユネスコ無形文化遺産に登録された。ユネスコのホームページにて一連の工程の動画が公開されており、竹製のタタリ状製品もみられる（2015年５月現在）。
http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?lg=en&pg=00011&RL=00453
14 からむし工芸博物館の吉田有子氏および織姫交流館にご教示いただいた。
15 角山幸洋「出土多多利について」（前掲註10）。
16 太田英蔵「紡織具と調庸絁」『日本の考古学』Ⅵ、河出書房新社、1967年、pp.347-366。
17 永原慶二『苧麻・絹・木綿の社会史』吉川弘文館、2004年。
18 藤堂保明・竹田晃・影山輝國『倭国伝　中国正史に描かれた日本』講談社、2010年。
19 布目順郎「麻と絹」『弥生文化の研究』５、雄山閣、1985年、pp.184-188。
20 東村純子『考古学からみた古代日本の紡織』改訂新装版、六一書房、2012年。
21 四日市市立博物館『神宝の美』1996年。
22 永原慶二『苧麻・絹・木綿の社会史』（前掲註17）。
23 竹内晶子『弥生の布を織る　機織りの考古学』東京大学出版会、1989年、p.７・15。
24 島田勇雄ほか訳注『和漢三才図会』５、平凡社、1986年。
25 奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿古代編』解説・図版、1985年。
26 奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿原始編』解説・図版、1993年。
27 高久健二「楽浪郡と三韓」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店、1995年、pp.235-284。
高久健二「楽浪郡と三韓・三国文化」『考古学ジャーナル』392、1995年、pp.21-26。
28 木村幾多郎「刻骨」『弥生文化の研究』８、雄山閣出版、1987年、pp.55-65。
29 木川正夫「刻骨と鋸歯状木製品に関する比較考察－楽器説をめぐる諸問題について－」『年報　平成10年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、1999年、pp.160-181。
30 木川正夫「刻骨と鋸歯状木製品に関する比較考察－楽器説をめぐる諸問題について－」（前掲註29）。
31 木川正夫「刻目のある木製品について－ササラの起源と変遷－」『民具研究』87、1990年、pp.１-17。
国立伽耶文化財研究所・国立金海博物館『나무，사람 그리고 文化』（前掲註１）。

32　九州歴史資料館資料普及会『大宰府史跡　昭和55年度発掘調査概報』1981年、第44図９。

挿図出典

第１図　財團法人嶺南文化財研究院『慶山 林堂洞 低濕地遺蹟 木器』2014年。
　　鳥取県埋蔵文化財センター『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告１　木製容器･かご』2005年。
第２図　第三次沖ノ島学術調査隊『宗像沖ノ島』本文編、宗像大社復興期成会、1979年、FIG75・111。
第３図　『和漢三才図会』を基に作図。
第４図　奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿原始編』解説、1993年。
第５図　国立伽耶文化財研究所『韓国木器資料集』Ⅲ、2014年。
　　財團法人嶺南文化財研究院『慶山 林堂洞 低濕地遺蹟 木器』、2014年。
第６図　『搗練図』を基に作図。
第７図　四日市市立博物館『神宝の美』1996を基に作図。
第８図　『和漢三才図会』を基に作図。

作図には辻本あらた氏、美濃久美子氏の協力を得た。

한일 고대 목제품에 대한 각서
-쩐지형(タタリ狀) 제품에 대하여-

石橋 茂登 (이시바시 시게토)

요 지 일본과 한반도의 고대문화에 관해서는, 여러 상호 관련성이 이야기되어 왔다. 목제품 등의 유기질 유물도 그 중 하나이다. 본고에서 주 대상으로 하는 것은, 쩐지라고 불리는 방직관계 도구이다. 『목제품 집성 도록 긴키(近畿) 원시편』에 따르면, 쩐지의 기능은 두 가지이다. 하나는 두드려 패어 유연하게 만든 마의 섬유 묶음을 거는 대(臺), 거기에서 섬유를 가늘게 나누어 쪼개고 연결하여 꼬기 이전의 실을 물레질하는 績麻(삼에서 실을 뽑는) 도구이다. 또 하나는 실을 뽑아 타래에 감은 실뭉치를 일시적으로 걸어두는 타래걸이로 쓰인다. 민속예 등을 참고했을 때, 전자는 가는 소형의 기둥(봉)을 세우고, 섬유를 일시적으로 걸어두기 위한 걸이이다(A류). 나뉜 식물섬유를 이어서 연결시키는 「잣기」작업에 사용하는 경우가 많다. 후자는 짧은 봉을 세운 대를 복수로 짜 맞추어, 봉에서 봉을 감듯이 타래를 거는 도구이다(B류).

A류의 출토품으로는 沖ノ島(오키노시마) 22호유적 출토의 금동제품이 쩐지로 유명하다. 千葉(치바)県 菅生(스고우)유적, 鳥取(톳토리)県 塞の谷(사이노타니)유적, 島根(시마네)県 타테쵸우(タテチョウ)유적 등의 목제품이 쩐지로 보고되어 있다. 한국에서는 광주 신창동 출토의 판상품이나 경산 임당동 저습지유적 출토품에서 이와 비슷한 것들이 있다.

쩐지는 일본 독자의 도구는 아니다. 현대 한국의 민속예, 한산 모시의 전통기술(苧麻・모시의 방적)에서 A류의 쩐지형 제품을 사용하고 있다. 『魏志 倭人傳』의 기재나 출토된 베(布)에서 예부터 왜인은 모시의 방적을 하고 있다. 중국의 회화에도 A류가 그려져 있기 때문에, 중국에 그 기원이 있을지도 모른다. 민속예에서는 모시에 쩐지를 사용하는 경우가 많으나, 비단의 실을 연결하는 작업에도 쩐지와 많이 닮은 물건이 보인다. 쩐지는 모시・베에 한정되지 않고, 짧은 섬유에서 실을 잣는 작업을 할 때 섬유를 거는 A류와, 실뭉치를 걸어 실타래에 감아 내는 작업에 사용하는 B류의 것 등이 필요에 따라 사용되었다고 판단된다. A・B류 모두 간단한 형태이기 때문에, 출토되어 있으면서도 불명품으로 간과되고 있을 가능성이 있다.

주제어 : 목제품, 쩐지, 방적, 저마(苧麻), 모시

Memo on Ancient Wooden Implements of Japan and Korea: On *Tatari*-shaped Items

Ishibashi Shigeto

Abstract: Various mutual relations have been pointed out regarding the ancient cultures of Japan and the Korean peninsula. Organic artifacts such as wooden implements represent one of these. The main object of this contribution is a tool related to spinning called *tatari* in Japanese. According to the *Mokki shūsei zuroku, Kinki genshihen* [Illustrated anthology of wooden implements, Kinki prehistoric volume] (Nara National Research Institute for Cultural Properties, 1993), variants of this item have two functions. One was as a stand for hanging bundles of hemp fiber that had been softened through beating. From there the fibers were thinly split and joined, and it thus served as a tool used for drawing out thin fibers prior to twisting into thread. Another was for temporarily holding skeins of spun thread that had been wound on a skein winder. Taking folkloric examples into consideration, the former took the form of a rod stood upright, to serve as a stand for temporarily hanging the fiber (Type A). It was mainly used in the task of splitting and twisting together the plant fibers. The latter consisted of a set of several upright rods set in stands, on which skeins could be hung by winding around from rod to rod (Type B).

As recovered examples of Type A, the gilt bronze items from the Okinoshima No. 22 site are famous as *tatari*. Wooden implements from sites such as Sugō in Chiba prefecture, Sainotani in Tottori prefecture, and Tatechō in Shimane prefecture, are regarded as *tatari*. In South Korea as well, there examples which appear similar, such as a board-shaped item recovered at Sinchang-dong in Gwanju, and another item from the Yimdang-dong wetland site in Gyeonsan.

Tatari is not a tool unique to Japan. As a modern Korean folk example, items in the shape of Type A *tatari* are used for making ramie thread in the traditional technique of *mosi* (fine ramie) weaving in the Hansan region. From descriptions in the "Account of the Wa (Japanese)" in the Chinese text, *Wei zhi*, and from recovered examples of cloth, it is known that the Japanese have made ramie thread from ancient times. As the Type A *tatari* is depicted in Chinese drawings, it may have its roots in China. While *tatari* are used for ramie thread in many folk examples, similar items were used in the task of making silk thread as well. It thus may be thought that *tatari* were not limited to use for ramie or hemp, but that both Type A for hanging material in the task of twisting thread from shorter fibers, and Type B for holding skeins in the process of taking up thread on winders, were used as needed. As both Types A and B are simple forms, they are possibly overlooked as items of uncertain nature even when they are recovered archaeologically.

Keywords: wooden implements, *tatari*, spinning, ramie, *mosi*